



### ◆袴田 洋子◆ 新連載

昭和42年生まれです。埼玉県朝霞市というところで、介護保険のケアマネジャーをしています。元は看護師でした。

子どもの頃から、コミュニケーションがヘタクソで、「言い方がキツイ！」「冷たい！」と言われていました。最もコミュニケーションがヘタクソで、人間関係の失敗を繰り返していた頃に診断受けたら、「境界性パーソナリティ障害」なんて言われたかもなあと思っています。

ラベルがあってもなくてもどうでもいいのですが、手っ取り早く自分を説明するのに、使用したりしています。なので、自分は「当事者」の面を持っている、と自分で意味付けをしています。

そんな自分が何を血迷ったか、看護師になりました。人間関係うまくやれない人間が、人間を援助する援助職になれば、当然、恐ろしいほどの失敗が待っています。でも、多くの方からの応援をもらって、少しずつ回復の道を歩めている…ような気がして、今は、自分のことが嫌いではなくなりました。

そんな落ちこぼれナース誕生の話から始まる、「援助職のリカバリー」です。どう

ぞ、お読みいただければ、嬉しいです。

### ◆乾 明紀◆ 新連載

マガジンへの初めての投稿を終えて、岩手県の花巻へ向かおうとしている。花巻の高校生に就職支援ガイダンスで講師をするためだ。厚生省主催のこの事業に昨年からの協力することになった。就職先を周旋することはないが、就職支援という少々“お節介”なことをしている。

『周旋家日記』は、お節介好きによるお節介実践日記になるだろう。今回は自己紹介的な内容で書かせていただいたが、次回からは、私の周旋したことを(お節介にも)書かせてもらうことをご容赦いただきたい。

### ◆國友 万裕◆

この頃、FACEBOOK に凝っています。以前はブログをやっていたのですが、ブログの場合だと匿名なので、見ず知らずの人からとんでもない政治的なコメントを入れて来られたり、ぼくのほうも調子にのって激しいことを書いてしまったりで、トラブルになることが多々ありました。

しかし、FACEBOOK は実名ですし、ぼくのほうが承諾した人でなかったら見ることはできません。しかもブログのように長々書くものでもないの、その日に起きたことをスケッチ風にさらりと綴って、写真を入れて、親しい友人たちとのコミュニケーションの場となっています。書く内容と言えば、今日は美味しいレストランで食べました、こういう映画を見ました、スポーツクラブのプールに行きました……ととりとめのない話ばかりなので、ブログのように喧嘩になることもありません。

友人登録してくれているのは、今のところ10人。男性8人、女性2人です。東京周辺在住が6人、関西在住が3人、北陸在住が1人です。FACEBOOK のおかげでしばらく疎遠になっていて、もう会えないと思っていた人にも再会できて、

友情が復活しました。

これから徐々に友達の輪を広げていこうかなと思っています。友達の友達はまた友達だ……と広げていくのがFACEBOOK の目的でもあるのでしょうか……。ただ、ブログで嫌な思いをしているので、躊躇しているところです。

援助マガジンがらみの人たちだったら、そんな失礼なことは書かないだろうから、執筆者の人、及び読者の人で、ぼくと友達になってもかまわないという人がいたら、是非、友達リクエストをください。友達が増えれば、思わぬ知恵も貸し借りできますからね。援助のためのバーチャル・コミュニティを一緒に作りましょう！

### ◆中村周平◆

昨年12月に、母校である京都成章高等学校のラグビー部OB会に参加させていただきました。全国大会に見事出場を決めてくれた後輩たちの壮行会を兼ねたOB会です。現役の頃は「選手」として行かせていただいたことはありましたが、怪我をしてからは初めての参加でした。「自分が参加しても大丈夫だろうか」、正直なところ、緊張や不安がなかったといえばウソになると思います。でも、同期や先輩方と会った瞬間、その緊張や不安は一瞬にして吹き飛びました。9年前と何も変わらない光景がそこにはありました(みんな体型がだいぶ変化してはいましたが)。OBの方々も、暖かく迎え入れくださいました。「なんだ、壁を作っていたのは自分じゃないか」。自分に重たくのしかかっていたものがスウッと無くなっていくのを感じました。いちOBとして「ここ」に戻って来れたことに心の底から感謝しました。

### ◆坊 隆史◆

未曾有の大震災から一年が経った。その災害が起こった時、私はカウンセリングの最中だった。近くで揺れを感じている人もいたそうだが、私とクライアント

氏は全く揺れに気づかなかった。多くの人命と生活を奪った津波の被害も後ほど知った。「3・11」。この日私は福島県へ行く予定をしていた。事情があつて取り止めになったのだが、もし行っていたら福島に知人もツテもない私はどうなっていたか想像もつかない。私のようにその日東北に行ったことで被災された方もあれば、現地の方がたまたま遠地に出たことで直接的な被災を免れた方もおられよう。「もし…」などないが、どうしても「もし…ならば」と考えてしまう。

あれから一年。仕事で関西から関東に行くことが多いが、震災直後は街が閑散としていた。東と西の温度差に違和感があったが、東にもずいぶん旅行者が戻ってきた。5月には東京スカイツリーが開業する。近くのホテルに泊まると地域はずいぶん盛り上がっているように見受けられる。私たちは先へ進んでいかないといけない。日常を取り戻していかねばならない。しかしまだまだ不自由な生活をされている方々、まだ渦中の対応をしている方々がおられることを忘れてはならない。改めて犠牲者の方々のご冥福、被災者の方々が少しでもより良い生活を取り戻されることを心よりお祈り申し上げます。

## ◆ 田 遊 ◆

先日、新卒大学生の最終面接に立ち会いました。何か質問をとのことだったので「橋下市長についてどう思うか」と聞きました（ほかに「原発について」などみつつを質問）。すると彼は「よく知りません」と答えました。そんなに難しいことを聞きたいわけでも、政治的スタンスを聞きたいわけでもなかったの、「なんでもいいよ」的な問いを重ねましたが、本当に知らないのです。ちょっとびっくりしました。

[www.danasobu.com](http://www.danasobu.com) /  
[twitter.com/danasobu](https://twitter.com/danasobu)

## ◆ 藤 信子 ◆

久しぶりに50分程歩いて、堀川御池を下がったところにあるデイサービスセンターに行った。月1回の訪問時に、以前はお天気の良い時はよく歩いたけれど、この2年近く何だか忙しくて時間が取れなかった。30分余裕があると歩けるのだけれど、その余裕がなかった。堀川の川沿いの遊歩道を歩きながら、春めいてきた中をぼんやり歩いた。東日本大震災から1年になる。今年は2月の盛岡から始まり2ヶ月に1度、東京、仙台、京都、神戸、東京で日本集団精神療法学会の「相互支援グループ」を開催することになっている。相互支援グループを長く継続するため、また技法を伝えるためには、まだまだ体力が必要だと思うので、ウォーキングの機会をできるだけ作ろうと思った。

## ◆ 水野スウ ◆

週いちオープンハウス「紅茶の時間」の家主。石川県在住。

「紅茶の時間」 U R L  
<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

金沢の隣の津幡町に移り住んで、この春で20年。向かいの雑木林から、名も知らず根っこごと抜いてきた幼い苗たちは、庭にしっかり根づいて、コナラ、合歓、ウワミズザクラ、藤、クロモジ、とそれぞれ一丁前の木に育ちました。やがて来る夏、わが家の緑のエアコンに一役かってくれます。

今年は北陸も、2月半ば過ぎまで大雪でした。去年から、雪を甘く見るまいぞ、と自分に言い聞かせてたので、真冬の前はできるだけ控え、その分、家にももって、新しい本の原稿を書きはじめていました。

マガジン連載のタイトルでもある「きもちは、言葉をさがしている」は、あいもかわらず、私の大切なテーマです。き

もちと言葉、伝えると伝わる、コミュニケーション、そして家族、といった本になりそう。マガジンでこれまで書き続けてきたことが、はからずもその重要な下地になってることに気づいて、あらためて感謝！です。

## ◆ 尾上明代 ◆

2月中旬、ドラマセラピー教育・研究センターで、アメリカのトップドラマセラピストの一人、David R. Johnsonと、トラウマ療法専門の精神科医 Hadar Lubin 両氏（ご夫妻）を東京に招き、セミナーとトレーニングを行いました。Davidは、ドラマセラピーの中でも特殊な、しかしその本質がふんだんに現れる「発展的変容」という手法を創始した人です。Hadarは、Counting Methodという暴露療法（EMDRやPEと同じ効果があるのに、大変シンプルなもの）を、日本で初めて紹介してくれました。これは今後、きっと世界中で広まっていくことでしょう！参加者の方々に楽しく濃い時間を提供できて、主催者として非常に嬉しく思いました。

## ◆ 団 士郎 ◆

面接継続中の二つの家族に、大きなドラマや事件が起きている。中心にあるものを私が何とかできるわけではないので、周囲の様々な事象に働きかけることで、全体システムの変化を摸索してきた。そして今、ほのかな希望の灯りと、新たな嵐が見えている。

私生活では妻の手術後の回復プロセス再形成に、二カ所の医療機関で医師と会った。そこでは私は患者の家族だ。信頼できる会い方をしてくれる医師、具体的方法を提案してくれる医師。両方ともよき援助職者だと付添人としてありがたいと思う。子ども達がみな自立し、両親役割引退後の夫婦としての暮らしは、小津安二郎の映画「東京物語」を、時に連想させるような日々だ。

映画館で「ものすごくうるさくて、ありえないほど近い」を観る。あらすじを語る作品ではない。映画としては好き、嫌いがあるのかも知れない。私は人が何をもって回復を果たすのかを、息を詰めて見つめていた。そして最近、どこで読んだのだったか忘れたが、「今度、生まれる時も、又、君の親に生まれると思おう」と言って亡くなった父親のことを思い出した。

家族の中で親として生きるのは、凡人にはなかなかドラマチックで大したことだ。

### ◆西川友里◆

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成に関わっています。

…今回の原稿の締め切り翌日、小林賢太郎の舞台『うるう』を見に行くのです。それから数日後には、伝説のダンサー、ピナ・バウシュのドキュメント映画『Pina 踊り続けるいのち』を見に行けるかもしれないのです。舞台を見るのは半年振り、映画館は実に10年ぶり。

両方とも、大好きな大好きなパフォーマーの作品。「舞台も贅沢、映画も贅沢。DVD 出たら見たいんだ、そうしたら何度でも見れるんだし！」と普段なら無理矢理我慢するのですが、今回ばかりは、ダメだ、我慢できん、見たい！最高の物はやっぱり生で見るに限る！アート断食状態からの、なんと贅沢なアートグルメ。チケットを入手してから、毎日眺めてはニヤニヤしています。いよいよ明日。ああ嬉しい！

### ◆山本 菜穂子◆

私、手相をみてあげることができたらいいなと思うんです。興味を持ったのは小学生の頃。私の右手は「ますかけ」という、手のひらに横線が一本通っている相で、右手を開くとひらがなの「て」の文字のようなしわがあり、「ほら、私の手には『て』って書いてあるんだよ。」

と人に見せて驚かれるのが好きでした。父は左手がこの相で、なんとなく繋がりを感じて嬉しかったこともあります。

手相を見てあげて人が笑顔になったらちょっと素敵だなんて思います。一時保護所の子どもたちとか。。でも、これが実に難しく、この夢はまだまだ実現しそうにありません。

皆さん、手相は変化するって知ってました？私の場合、「ほほえみ」の事業を始めてからどんどん変わってきて。今、左手も「ますかけ」になりそうです。無かった運命線も出てきて、50歳以降の運命の筋がくっきりとどンドン太く、私の両手は「て」から「で」になっています。つまり、生命線が二重三重に強化され。

昨年、横浜中華街に行った時、初めて本業の方に手相を見てもらったんです。そうしたら、「90歳まで生きるから、そのつもりで人生設計を考えたらいい」と言われました。まだあと、40年もある。ナガッ！・・・よ～し♪

### ◆岡田隆介◆

家族療法をベースにした家族援助の研修会をやろうと団編集長と意気投合したのは、いまから21年前のことでした。児童相談所職員を中心に50名前後が集まり、予算化せずルール化せず、手をあげるところがあれば実施するという緩いつながりでやってきました。いまでは対人援助に関わる人が幅広く参加し、200名弱の会になっています。

昨年は滋賀で20回大会があったのですが、そのとき、うちの若い連中が次回を引き受けたいと手をあげました。過去に4回も引き受けていた私は、「えっ、また？」という気持ちでした。そして、予想通り簡単にのせられてその気になりました。ところが、いざ準備が始まると手伝い加減がさっぱりわかりません。ちょこっと口をはさみ、見かねて手を出してるうちに、もろ肌脱いで頑張ってるうちに、

まいりました。思えば、いつもこうやって若い芽を摘んできた気がします。終わった後、まじめにへこみました。

でも、やっと気付きました。わたしは追い越されることを潔しとせず、世代交代なんかに関心がなく、それでいて嫌われたくないという実にめんどくさい中高年なんだと。若者たちよ、まもなく日本はこんなジジィで溢れかえるのだ！

### ◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職

今年のスーパーボールはすばらしかった。録画観戦だったので、先に結果を知っての上で見たのだが、予想もしない展開だった。ラスト2分まではペイトリオッツの勝利を予想した。ジャイアンツの逆転は驚いた。もし、最後0秒のパスをキャッチしていればペイトリオッツの再逆転だった。ちなみに私は49ersのジョー・モンタナと同じ年。彼のようにきらびやかな55年間ではないが、自分では十分にドラマチックな人生を楽しんでいる。

### ◆北村 真也◆

私塾「アウラ学びの森」代表

(<http://auranomori.com>)

つい最近、50歳になりました。48から49になるのと、49から50になるのは、やっぱり違います。「こんな子どもみたいな者が、本当に50になっていいのか？」というのが、50歳の誕生日に正直に思った私の感想です。私のこれまでの人生は、実に単純明快。「学ぶ」ということの意味が分からなくなった16歳の時から、「学ぶ」ということだけをずっと考え続けていたら、いつの間にか50歳になってしまっただけのことのように思います。でも「学ぶ」ということは、決してひとりではできないものではありません。必ずそこには、自分以外の他者の存在が必要になってきます。自分とは違う視点が、学びを深化させるからです。

学びの世界にはまってしまった私の周りには、いつも誰かがいてくれました。そして、それがいつしか「学びの森」というカタチを誕生させることにつながっていったように思うのです。

### ◆村本邦子◆

去年はさんざんな1年だったような気がする。「これからは不良娘になって遊びまくる！」と宣言して今年を始めたが、成果はまずまず（どんなふうに遊ぶかって!?それは想像にお任せします）。お蔭で今のところとても元気です。

冬休みは、家族とともにスペインで楽しく過ごし、例によって、photobackのアルバムを作った。いつも登場人物の数だけ作ってプレゼントするが、今回は、スペインにいる娘に送料500円の「国際メール便」で直送してもらうことにした。ところが2週間経っても届かないという。クレームをつけると、すぐに詫言の返信があり、「出国までは確認できたが、それ以降を辿れない。これ以上お待ちさせるわけにいかないので、再発行してEMS(国際スピード郵便)で送ります」という。娘に知らせると、「日本の会社の対応の良さに感動して泣きそうになった!すごいな!」と返ってきた。いつもは過剰で煩わしく感じる日本のサービスも、一歩国外に出ると、その有難みを痛感することは少なくない(ちなみに、つい最近も、イベリア空港のeチケットをうっかり削除してしまって再発行のお願いをしたが、スルーされた・・・)。

そして、つい今しがた、photobackから「本日発送しました」というメールが来たのだが、「国名がSPAINでなくSAIPANになっていたの、そこだけ修正しました」とさり気なく書かれてあった。なんと、なんと、私のミスだったのだ。送付先を再確認した時にも気づかなかったが、リストから国名をクリックする時に見間違えたか、ずれてしまったのだろう。今頃、サイパンのアンダルシアを目指し

て、どこかで迷子になっているはず。

それにしても、なんて寛容で大人な対応であることか。すっかり感心して唸ってしまった。早速、お礼メールを書いた。私は長年のphotoback愛用者で、周囲に多くのphotoback愛用者を増やしていること、今回の親切な対応に感動して、さらに良い評判を広めますと(そして、こうして広めている!?)。今回は2冊本なので、向こうは5千円ほどの損失になったと思うが、顧客に親切にすれば、めぐりめぐって良いことが起こるのだ。

一人で興奮していると、「日本の会社だからって、ふつうそこまでせんやろ。450円でアルバム作れるところがあるで」(photobackが高いと言いたいのか?)と息子がクールに言い放った。なんの、なんの。うちの研究所でも、届いたの届かないののクレームに対しては、同じ対応をしています。そして、感謝の返信がきたら皆で「嬉しいね〜」と大喜びします。こうやってネットワークはできていくんだから!(今号参照のこと)

### ◆川崎二三彦◆

この原稿、締め切りには遅く、梅が咲くにはまだ早い水戸駅の構内で書いている。

\*

それはさておき、横浜の地に設立された「子どもの虹情報研修センター」は、3月末でちょうど10年の節目を迎えるのだが、気がつくとは私は、いつの間にかその半分をこのセンターで過ごしているのである。ではその間に、私はいったい何をなし得ただろうかと思うと反省しきりの日々だけれど、全国各地に出かけていったことは間違いない。用向きは、センターの業務や厚労省の仕事であったり、「そだちと臨床」誌のインタビューや各地から頼まれた研修講師であったりとさまざまである。ちなみに5年間でまだ足を踏み入れていない都道府県を数えてみると、5本の指が余ってしまった。

あちこち出かけただけに、失敗もそれに

比例して無数にあり、呆け日誌は満載となっているのだが、忙中閑、今日は慰みにその一つを披露してみようと思う。たぶん最大のピンチに見舞われたのは、大阪での某研究会だろう。さる年の土曜日のことだ。講師を引き受けて当日は準備万端整え、日時もきっちり確認して新幹線に乗ったところまではよかったのだが、はっと気づいて鞆の中を調べると、果たして開催案内を忘れていた。午後1時半からということだけは記憶していたのだけれど、肝心の会場がわからない。新幹線の中から主催団体の事務所に電話しても、土曜日は休業で連絡が取れない。

「ウウム、もしかしてあの人はこの研究会に参加しないかしらん」

などと考えて心当たりの人を携帯電話で呼び出してみたが、そんなに都合よくいくはずもない。このときばかりはさすがに焦った。このままでは新大阪で立ち往生するしかないではないか。

「あのう、〇〇事務所の部屋の前に、今日の研究会の案内が貼り出されてないか、見てきてもらえませんか」

窮鼠猫をかむ。最後は、主催団体が入っている建物の管理室に電話して、強引に頼み込んでみた。と、どうであろう、世の中、捨てる神あれば拾う神あり。親切な管理人が、わざわざ部屋まで出向いたところで、主催者の一人がたまたま資料を取りに来ていて、なんとか事なきを得たのであった。

\*

おっと、こんなことを書いているうちに、約束の時間に遅刻しそうになっている。梅の開花も間近、仕事に取りかからねば…。(2012/02/27 水戸にて)

### ◆中島弘美◆

#### CON カウンセリングオフィス中島

昨年から今年にかけて、これまでとは異なる地域で、社会福祉関係の現任職員対象の研修を担当する機会がありました。

研修テーマは、家族理解や家族支援に関することや事例検討などです。すると、受講者の反応がよく、続編を希望する声もあって、お引き受けしてよかったと思いました。

私としては、これまでやってきたことをコンパクトにまとめたので、もうちょっと時間があれば、さらにできることあるのだけれど、と思うのだが、受ける立場からすると、ちょうどよかったのかもしれない。

しっかりと受け止める力をもった人と学ぶことは、とてもたのしいです。いや、もしかしたら、大学で学生さんに話しているの、伝える技術アップ？それはあんまりあたっていないような気がします。

きっと、受講者が学びたいと考えているテーマと、研修内容が一致したからかな、セッティングしてくださった、企画が良かったのかな？

効果的な研修はどのようなものなのかについて、磨きをかけたいと思っています。

### ◆ 千葉 晃央 ◆

■ ジーン・シャープ ■ 「How to Start a Revolution 非暴力革命のすすめ ジーン・シャープの提言」(イギリス 2011 Big Indy / Lion Television) を観た。SNS 革命といわれていたりもする昨今の独裁体制の崩壊のニュース…。実は SNS だけでなく、非暴力闘争のやり方を発信している政治学者ジーン・シャープの教えが教科書になっている。「非暴力闘争」の手段として、シンボルマーク、シンボルカラーの作成、戦略を立てる(集会時間、集会時の振る舞い等)、細分化に負けない、暴力に抵抗(女性、高齢者等が笑顔で花等も持ちながらデモの先頭へ、暴力的衝突を回避)、諦めないなど 198 の方法を提示。

これが載っているのが「From DICTATORSHIP to DEMOCRACY」(独裁から民主主義へ)世界 30 国語に

翻訳されている。…ってアマゾン検索では、日本語版が出てこない。。ないのかい？やっぱり？「脱原発」など集会多数開かれているけれど、日本語版がないのはなんだろう？「非暴力闘争」のコツって、脱原発の今こそ必要では？

### ◆ 三野 宏治 ◆

様々なところで学生がアルバイトをしています。小さな町なので彼らのバイト先である牛丼店やファストフード店、本屋などでよく目撃されます。学生たちは堂々としていて恥ずかしがらず挨拶をしてくれます。彼らは「あっ！」と言ったあと、必ず「どうしたんですか？」と聞きます。この問かけは変だとも思ってしまう。何故なら、「どうした」もこうしたも、牛丼店には牛丼を食べに来たのだからファストフード店にはハンバーガーを買いに来たのだから、本屋には『小学館 学習百科事典 5 動物図鑑』を買いに来たに決っています。私は彼らの質問の不適当さを心の中で正しながら「仕事頑張ってください」などと答えています。

講義の最後 15 分くらいの時間で、私は学生に対して授業に対する質問や感想を書き提出することを課しています。それぞれの店で彼らと出会った週の講義のペーパーには「牛丼はおいしかったですか？またのご来店をお待ちしています」や「クリスマスにモスチキンはいかがですか？」あるいは『小学館 学習百科事典 49 クワガタムシ』入荷しましたなどという記述が散見されます。「仕事頑張ってください」という言葉通り営業活動に励む勤労学生たちです。

### ◆ 荒木晃子 ◆

生殖医療施設心理士。立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。

昨年終盤、この歳でバーンアウトを初体験した。その後は順調に回復し、絶好調で迎えた 2012 年のお正月。万にひと

つの希望を捨て切れず、母用に手作りした今年のおせち料理は「見かけより内容重視」。流動食しか口にできない母の為、「微塩・微糖、しかも、ミキサーで即スープ状になる」というすぐれもの。ご満悦で迎えた元旦は、母を病院のベッドから車いすへ移し、入院先の正面玄関で母が溺愛する愛犬アンリと一緒に恒例の元旦記念撮影会。おりしもその日は好天に恵まれ、リードを握る母を車いすごと引っ張るその様は、まるで南極犬アンリ状態。今年のスタートは、終日笑いに包まれた家族の風景で始まった。

一夜明けた翌 2 日。「ハハ、キトク」の連絡で、駆け付けたベッドに横たわり、小さく息する母を眺め数日を過ごす。「人工呼吸器と胃ろうの手術」。主治医が提示する「残された手段」は限られていた。私は、5 年前天国に旅立った父を想った。生前希望していた「延命拒否という父の意思」を、その時悲嘆に暮れていた母と娘は実行することができなかった。夫を・父を失うことを恐れ、家族の死の準備もできぬまま、呼吸器をつけ苦しうに息を続ける父を見守ることは、家族として、その生をよろこぶと同時に、また辛くもあった。しかし、父はそれ以上に苦しうだった。最期に父は、自ら呼吸器を引き抜き、そして天国へと旅立って行った。その人生を通して強い意志を貫き、家族を深く愛した父らしい最期であった。

現在、母は自発呼吸で息している。皆が元気だったとき、家族で話し合い、確認し合ったそれぞれの意志を・希望を、愛娘の私が、いま継いでいる。「晃子の手をわずらわせない」。賑やかな家族の団欒に交わされた、父と母のいつもの会話を思い出す。点滴で命をつなぐ現在の母は、穏やかに過ぎゆくときに身をゆだね、日がな一日夢の中。何も食べないことで、母の命は続いている。時折かける娘や看護師さんの声に目覚め、声にはならないクチパク(口をわずかに動か

す動作)で返事する。「お母さん、仕事に行ってくるからね！帰ってくるまで待っててね！」すると、かすかに母の口が動く。「いってらっしゃい」と。これって、きっと、誰にもわからない、家族の会話なんだな。

父とは違い、母は時間をかけ、ゆっくりとその時を迎えようとしている。ひとり残される娘をおもい、その準備ができるのを待つかのように。

「でも、お母さん、もう少し、私が帰るのを待ってね」

### ◆ 浦田 雅夫 ◆

いよいよ京都で、子どもシェルターが開所します。孤立無援でホームレスの子どもたち、家はあっても居場所がない子どもたち。そんな子どもたちが、安心して暮らせるような場を提供できるよう、支援者のみなさんと取り組んでいます。ぜひご協力ください。

<http://www.nonosan.org/>

### ◆ 中村 正 ◆

「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助研修会第21回大会」に招かれ、トークシンポジウムに参加した。なんと登壇者は本マガジン執筆者ばかりだった。岡田隆介さんが企画したのだが、団士郎さんと川崎二三彦さんと私だった。テーマはあってないようで家族についてのよもやま話のてんこ盛り。2月4-5日、安芸の宮島の目の前にあるホテルで、カキのシーズンだったのでおいしさも堪能しつつ、ライトアップされて海に浮かぶ厳島神社の鳥居の真下までのナイトクルーズも圧巻で、ゆったりとした時間を過ごすことができた。トークの時間は3時間もあったが短いという印象でもっと話をしたかったが腹八分でよしとしよう。翌日の家族支援のワークショップにも楽しく参加できた。午前中は、衣斐哲臣さん(和歌山県子ども・女性・障害者相談センター)と宮井研

治さん(大阪市子ども相談センター)の「あなた家族援助において何をどんなふうに介在させていますか?~“介在”視点の提唱~」のワークショップ、午後は紺田礼子さん(広島市児童相談所)と岡田隆介さん(広島市児童相談所、広島市こども療育センター)の「家族を知る、見立てる、手立てする」というワークショップに参加した。両方とも「きつい事例にやわい支援」という大会のテーマにぴったりの内容で、脱力系でありつつも、不思議な元気をもらいながら参加できた。「やわい支援」というのは当該家族のもつ力に依拠するということであると思った。いいテーマだと感心した。このテーマを考えた岡田さんをはじめとした広島の方々への熟練を感じた。京都への途中での乗り換えの不便はあったが帰りは九州新幹線の「さくら」の初体験もできた。普通車の二列シートを無邪気に喜んだ。とても貴重な時間を広島のみなさんありがとう。

### ◆ 鶴谷 圭一 ◆

マガジン4号で「障がいを持つ子どもの入園」について書かせて頂きましたが、その子どもたちもクラスを進級して1年が経ちました。今は3学期なのでもうすぐ一人は卒園、もう一人は年長になります。

年長の一人は自閉症という診断がされていますが、彼にわかる方法で言葉を伝えることでほとんどの活動を、クラスの友だちと出来るようになり、小学校も普通クラスでいけるだろうというところまで発達しました。

年中組に進級した一人は、遅れは見られるものの、ことばによる意思の伝達が出来るようになり、我慢も出来るようになりました。

そして、4月に新しく入園した年少児にも一人、言葉が通じず目も合わせずに毎日毎日、暑い日も雨の日も外に出ていた子どもがいました。今は、まだハッキリしない発音ながらクラスの友だちと

一緒に遊び、部屋に入りクラス活動にも参加しています。

1学期にはずっと彼らと行動を共にしてきた担任や加配の教員にとってはもちろんのこと、園の職員みんながその発達に目を見張り、あの1年前の苦労が信じられないという嬉しい思いを共有しています。もちろん、親御さんも、クラスメイトのお母さん方も同じ気持ちでしょう。子どもの発達ってすごい。

4月からは新しい園児と一緒に障がいを持った子どもたちも入園してきました。また気を引き締めて迎え入れたいと思います。

### ◆ 河岸 由里子 ◆ (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰  
一人漫才

「この間、はじめて裁判所の法廷で証言したんよ。」

『ついに、捕まったんかあ?何したん?』

「ちやうわ、人間きの悪いこと言わんといて。ただの証人やて。」

『何売りに行ったん?』

「その商人やないって、証人、法廷で物売るわけないやろ!」

『あー、証人ね。[私は見た、家政婦のミタって]』

「あほか、目撃証人やなくて、意見陳述」

『イケンチンジュツ?なんか難しそうやなあ。何の意見?』

「うん、対人援助職、家庭児童相談員のストレスについて」

『これまた面倒な話やなあ、なんであんなが?』

「元家庭児童相談員やったし、臨床心理士=心の専門家やと言う事で」

『へえ~、あんた家庭児童相談員やったの、知らなかったわ、で?』

「ほんでな、宣誓ってあるやん」

『あ~森昌子の』

「それはせんせ~い~って何歌わせんの!」

『誰も歌えとは言っていない・・・』  
「先生やなくて宣誓や」  
『あ～そっちか。高校野球とかでするやつ』  
「まあ、そんなもんや。嘘偽りは申しませんって宣言する」  
『ハハハハ、それそのもんが嘘やろ』  
「それが嘘じゃ話にならんやろ。嘘言うたら偽証罪になるんや」  
『なんか恐ろしいなあ』  
「そうなんや。別に嘘つく必要もないんやけどなあ、言葉に気い使うやろ？」  
『うんうん、前と後ろで違うこと言うたらあかんしなあ。そやかて、あんたやったら、面の皮30cm、心臓に鉄釘生えてるさかい・・・』  
「あたしゃ化けもんかい！化粧は厚いが30cmもないわ。って何の話や！まあ、心臓強い方やけど、そのあたしが、エライ気いはってな。」  
『うんうん、で？』  
「ちょうきんちょうしたって・・・」  
『くだらん！』  
お粗末さまでした。

### ◆ 木村晃子 ◆

北海道当別町ケアマネジャー

#### もう一つの連載 ～梅漬け～

90歳を過ぎた、ヤエさんのお宅へ訪問です。

テーブルの上に「これ」と置いた小皿には、色鮮やかな梅漬けがある。「私が漬けた梅だよ。あんたも食べてごらん。」そう言って勧められて梅漬けを一つ、口の中へ入れた。それは、ちょっと酸っぱい、でも口の中にとろけるように広がった。酸っぱさに照れ笑いをしていると、ヤエさんが話し出した。

「私ね、子供を川へ流してしまっただね。」ヤエさんから思わぬ言葉が飛び出した。「川へ？流して？と、言いますと？」ケアマネジャーは理解できぬまま質問した。

それは、田植えの時期でした。一家総

出の田植え作業でした。当時まだ学校に上がる前の長男が、たんぼの横で大人たちの仕事を見ながら遊んでいました。夕方作業を終えて家に戻ったヤエさんは、長男の姿が見えない事に気が付きました。その夜、大人たちは必死で探しましたが、結局長男はみつかりません。それから、2日後、たんぼにつながる用水路が川に合流した先のところで長男の悲しい姿が見つかったそうです。長い間ヤエさんは、何度も何度も自分を責め、この出来事は家族の中で語られることはなかったそうです。この梅干しは、赤紫蘇できれいに色づけされたものでした。梅漬けを作る頃に、長男が赤紫蘇の葉を楽しそうに採り集めたそうです。そして、酸っぱい梅漬けが出来上がると、はしゃぎながら、ごはんのおかわりを催促していたそうです。「毎年息子のことを思い浮かべながら梅を漬けていたよ。そろそろ梅漬けもやめて、息子のところに行く日が近いね。」そう言ってヤエさんは遠い昔の苦しい思い出を話してくれた。

### ◆ 松本 健輔 ◆

『何を選ぶか』それはその人らしさができるように思う。毎日のように沢山の夫婦をカウンセリングしていると、配偶者選択には特にそれが顕著だと感じる。偶然出会って恋に落ちて結婚するわけであるが、そこにはある種の必然がある。そう思わせてくれるほど、配偶者の選択にはその人のパーソナリティーが反映されている気がする。

そう思いながら自分を振り返るとどうなのだろう。自分の配偶者の選択は自分でも自分らしい選択だと思う。ただ、それは外から見ているとまた違って見えるかもしれない。さらに難しいことにその選択が自分の何を映し出しているのかが見えるのはきつとこれから先のような気がする。自分達夫婦が今後どうなっていくのか、今からとても楽しみでしかたない。

### ◆ 脇野千恵 ◆

先月、奈良の若草山焼きを見に行きました。帰り道、駅前で若者らしき男性2人が小さな椅子に座り、女性と向かい合い真剣な表情で話を聞いています。ふと見ると、そのそばには「無料でぐち聞きます！」という看板が。へえーと、何とおもしろい商売？と思わず笑ってしまいました。私たちが聞いてもらおうかと、家族で談笑しながら通り過ぎました。帰りの電車の中で、「無料」という言葉が気にかかっていた。人の愚痴を聞く人ってどんな人？目的は？家族と色々話すうちに、あれってひょっとして出会い？婚活？という結論になりました。ために私のような中高年のおばさんなどの愚痴聞いてくれるのか、ちょっとチャレンジしてみればよかったと。そういえば熱心に話し込んでいた女性は若かったなあ。うまくいけばもっと詳しく聞かせてと、ぐち聞き場所は第2ステージへと向かうのでしょうか。私たちはそんなことしか想像できませんでしたが、他の人はどう思ったのでしょうか。

### ◆ 早樫一男 ◆

あつという間に23年度が終わりました。創刊号から、「家族造形法の深度」として連載してきましたが、家族造形法を使った機会がこの一年はたくさんありました。

振り返ってみると、家族心理学会主催の現任者向け研修(ワークショップ形式:数回)、児童福祉施設職員の定例研修(来年度も継続方向)、児童相談所とその近接領域における家族援助研修会(単発)等です。いずれにおいても、家族造形法を使った事例検討を実施しました。その都度、対人援助マガジンの連載を紹介しており、うまく運動していることをひしひしと感じています。

もちろん、従来の家族援助を目指す人のための研修会(ふるかわ家族研究所主催)や不定期の研修会(女性ライフサイクル研究所)も継続しています。

24年度、「家族造形法の深度」を極めたいようチャレンジです。

## ◆ 大野 睦 ◆

春の兆しが見られる日々ですが、この冬は格別寒く感じます。屋久島の森も冬は積雪。ハイビスカス越しに雪の積もる山が見えるのです。少しずつ暖かくなってくるといよいよ今年も始まるんだなあと新年のごとく感じる日々です。

大阪生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。屋久島でネイチャーガイドという職を通して多くの方とネイティブ(自然や人が持つ本来の)ビジョン(視点や考え方)を共有したいとエコツアー会社、有限会社・ネイティブビジョン設立。

BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net>

## ◆ サトウタツヤ ◆

近況報告とエッセイの内容が逆という誹りを免れませんが、光市の母子殺害事件における死刑が事実上確定しました(2012年2月20日)。ここに至るプロセスは学問から見れば大変興味深いものであり、死刑確定後における実名報道を巡る面白い事例でもあります。とはいえ、死刑廃止論の立場をとる私にとっては個人的に無力感にさいなまれた事例でもありました。筆を進めるにあたってまず、光市事件の被害者の方々のご冥福を改めて祈りたいと思います。暴力的に命を絶たれることは、当然、あってはならないことです。またご遺族が犯罪被害者の権利があまりに守られていないと感じたことから犯罪被害者の会(現、全国犯罪被害者の会)を設立し、こうした活動が犯罪被害者等基本法の成立の原動力になったことは非常に大きな出来事でした。

被害者(母子)の遺族は、必ずしも応報感情に基づく死刑を求めていたわけではないし、死刑確定後も喜びを口にすることはありませんでした。憎いという気持ちはもちろんありました。そういうことも述べて

います。一方で、いつだったか彼が語っていたのですが、「現時点のこの国におけるこの犯罪に対する最高の刑罰を与えることができるようにするのが遺族の務め」そうでなければ「妻子に申し訳ない」ということだそうです。逆説的ではありますが、現時点のこの国に死刑がなければ、無期懲役が最高刑ですから、それを得ることが重要で遺族の役割を果たしたと彼は考えたのかもしれませんが。あるいは他国に存在する死刑を導入せよと言ったのかもしれませんが、それはわからないことですが、(応報刑を求める人へのロジックや言葉を持っている私であっても)いずれにせよ、生きていご遺族自身が「殺された遺族のために力を尽くす」と言うことを止める言葉はないわけで、「娘を殺したあいつが憎いから殺したい、死刑にしたい」などという応報感情とは全く別の次元の願いであるわけです。個人的には非常に重い課題が突きつけられたように思います(まあ、楽観的な私としては面白い理論的課題ができた、と思っている面もあります)。

この裁判を巡っては高裁に差し戻された後の裁判において被告人がそれまで認めていた殺意を否認したこと、そして、結果的に殺人にいたった経過の説明内容が荒唐無稽に見えたこと、もまた大きな話題になりました。虚偽自白研究をしている立場からすれば、最初は無期懲役を確実にするためにすべてを認める方がいいという戦略をとっていたのだと思われます。量刑相場という語があるように、事件の内容によってだいたい刑罰は決まっています。どんな犯罪であっても、裁判ごとにあまりにも異なる刑罰が与えられるなら、不公平だという声ができるでしょう。量刑相場が存在するという前提のもとでは、光市事件の刑罰は基本的には無期懲役になるべきであり、罪を認めて反省する姿勢を示す必要があったのだと思われます。それを差し戻し裁判になったらいきなり否認では、誰も納得しないはずで、弁護団のやり方は、誰のために誰のもとにどのような声を

届けようとしたのか、ということを見誤っていたように思います。

そして、最後に実名報道を巡る問題ですが、死刑確定後に実名報道を行うことのロジックはどのようなものがあるのでしょうか。これを考えることは非常に重要なことだと思います。新聞に関して言えば、実名報道に切り替えた新聞社と匿名を維持した新聞社がありました。実名報道を行う理由は何でしょうか。「死刑が確定したことによって、更正可能性は無くなったので、実名報道は何も妨げない」という雑な説明をしていたメディアもありました。もう少し丁寧だと、「更正可能性は無いと判断されたものであるから」実名報道もやむなしという感じのメディアもありました。しかし、こういう説明もありました。「死刑は国家が命を奪う最高の権力行使であることを考えれば、その対象者は実名で報道する必要があると考えます」。このロジック、きわめて重要です。国家が秘密裏に匿名の者の命を絶つことは近代においては禁じられなければいけないのです。そして、彼は死刑に処せられるときに、殺人者ではなく国家に殺害される者に昇華されるのであり、たとえ実行時は少年で匿名報道であったとしても、多くの人が実名を知っていたとしても、死刑に処せられる者として実名をもって歴史に刻まれなければいけないと考えるのです。保護や更正という観点からだけではなく、国家の民衆に対する権力行使としての死刑という側面を私たちは忘れてはならないのです。光市事件について「悪いことした奴は少年でも死刑になる」「悪いことした奴は実名で報道され顔も晒される」という矮小化した理解は、きわめて皮相的なものであり何も教訓を残さないでしょう。改姓した被告人(死刑囚)の旧姓を報道する必要があったのか、については疑問なしとはしませんが。

2012/03/03 ブラジル・サンパウロにてイタリア・ブラジルで複線径路等至性モデル流行中